

## 第十一章 土地の地代——その性質と形成（五）

### 過去四世紀における銀価の変動に関する補論

#### 第二期

ただし、第一期の銀価格の動きには諸説があつたのに対し、第二期については見解が一致している。

一五七〇年頃から一六四〇年頃までのおよそ七十年間、銀と小麦の価値関係は前期と逆転した。銀の実質価値は下がり（同量の銀で買える労働が減り）、小麦の名目価格は上がつて、一クォーターは従来の銀約二オンス（当時の貨幣で約十シリング）から銀六〇八オンス（同三十〇四十シリング）へ切り上がった。

銀の相対的下落はアメリカの豊かな銀山の発見によるもので、この点は当時から説明も見解も一致していた。欧州では産業や改良が進み銀の需要は伸びていたが、供給の増加がそれを大きく上回り、銀の価値は顕著に下がった。もっとも、イングランドで物価に目に見える影響が現れたのは一五七〇年以降で、ポトシの発見から二十年以上たった

からである。

一五九五年から一六二〇年まで（両年を含む）、イートン・カレッジの記録によれば、ウインザー市場の最上等小麦（一クォーター＝九ブッシェル）の平均価格は二ポンド一シリング六と四分の三ペンスである。これを端数を無視して八ブッシェル当たり往直すため九分の一（四シリング七と三分の一ペンス）を控除すると一ポンド十六シリング十と三分の二ペンスとなり、さらに最上等と中等の価格差として九分の一（四シリング一ペンス）を差し引けば、中等小麦は約一ポンド十二シリング九ペンス、銀換算で約六と三分の一オンスに相当する。

まず、一六二一～一六三六年（両年含む）について、同じウインザー市場・同一規格（最上等小麦九ブッシェル＝一クォーター）の平均価格は、同一のイートン・カレッジの記録で二ポンド十シリング。前段と同様に八ブッシェル換算のための九分の一と、最上から中等への等級差としての九分の一を差し引くと、中等小麦八ブッシェルの平均は一ポンド十九シリング六ペンスとなり、銀換算でおよそ七と三分の二オンスに当たる。